

各地の民話・伝承「失われた陸地の物語」

平石 知良

ある民話や伝承を局地的に見たときには何の変哲もない話であったとしても日本全国、また世界規模で俯瞰したときに実に良く似た伝承が多く存在することに気がつくことが多々ある。非常に似通った伝承が広い範囲に渡り分布しているということは、民族の文化の流れが存在したであろう事実を如実に語るものであり、古くからこの日本にも存在したであろう磐座の前で祭祀をとり行った民族の精神性を語る上での大きなヒントとなることは想像に難くない。

日本各地に伝わる民話・伝承を広く知り、把握しておくことはイワクラ学研究にとっても決して無意味なことではないだろう。古くから語り継がれる民話・伝承は、それを伝えてきた人々の歴史において燦然と輝く文化の結晶であり、ある磐座の人工説、自然説とは無関係に、そこに過去確かに存在した人々の営みを様々な角度から解き明かそうとする

イワクラ学の研究、発展にも大きく寄与するに違いないからだ。

失われた陸地の話 (中村市史)

1. 民話に見える陸地の水没
名鹿沖の小島

名鹿沖にはひとつの小さな島があったと伝えられています。

島にはお地蔵様が祭られており、島の人たちは、そのお地蔵様の目が赤くなると何か恐ろしい変わった事が起こる知らせで島に居られんという伝えがありました。

ある日のこと、島に住む一人のいたずら者が地蔵様の目を赤く塗ってしまった、それを見た島の人々は、これは大変なことが起きるぞ、島に居られんと言ってみんなは逃げ出してしまいました。

だがそのいたずら者は自分が塗ったものなので、みんなが逃げ去ったことを笑っていました。しかし運悪く島に大地震が起こって島は埋

没してしまいました。

こうして逃げた人は助かったが、いたずら者だけは、ただ一人死んでしまい、それから島はしばらくの間、浮かんたり、沈んだりしていたが、遂に見えなくなつたと言います。

(語り 乾 綾雄)

2. 歴史資料に見る水没

白鳳の大地震(天武天皇13年、685年10月14日)について「日本書紀」に「時伊予温泉沈而不出。土佐国田苑五十余万頃、沈海」とある。

この面積五十余万頃、12万平方キロメートル、1157町歩の島々は、

1)「東の室戸岬より西のほう足摺岬に達する黒田郡と称する一円大地なり」

2)「黒田郡は、黒田、黒土、上鴨、下鴨の四郷に分け、石高26万石ほどの地」(土佐清水市史)であつたという。

石高で考察すれば、土佐24万石と江戸時代に称されていたのでそれと同程度の稲の圃場を持つ島々が失われてしまった。

考察

世界的に失われた陸地、海底遺跡に注目が集まっている。日本では、与那国の海底遺跡が有名であるが、まだまだ眠っている海底遺跡があるはずである。その一つが、最近発見された高知足摺岬沖の土佐清水市竜串弁天島の東、水深5〜10mのところにある海底遺跡である。その陸地の水没を伝える民話や伝承がそれぞれの地域で残されていることは上記の例を見れば明らかである。皆様のお住まいの地で島や陸地の沈没に関する民話や歴史等がありましたら、事務局まで情報をお送りください。